



相澤 幸四郎 (相澤家提供)

(また、あのふるさとの自然の中で暮らせるのだ。)

昭和二十八(一九五三)年、相澤幸四郎は、五十五歳の時に遠田郡北浦小学校校長として教員生活を終え、生まれ故郷である新田村(現在の登米市迫町)に戻って来ました。三十年ぶりのふるさとでの生活です。幸四郎の心に子どもころの思い出がよみがえってきました。

幸四郎の家は、伊豆沼の近くにありました。そのため子どもころの遊び場は、もっぱら沼と、その周りの大きな林でした。そこでトンボやチョウを追いかけたり、夏の暑い時期は、沼に入って水泳をしたりしたのです。お腹が空いた時には、ハスの若い芽をとって、食べました。米や野菜がとれない時期は家族が魚やヌマエビをとって売り、生活の足しにしていました。貧しかった子どもころ、まさに伊豆沼からたくさん恵みを受けて育ったのです。幸四郎にとってこの沼は、生活の一部であり、かけがえのない大切な場所でした。

ところが、三十年ぶりに見た伊豆沼の景色は、すっかり変わっていました。林の木々がたくさん切りたおされ、沼の浅瀬が干拓されて田畑になっていたのです。戦時中の食糧不足や戦後の人口増加のため、田畑を増やす必要があったのでした。

(人間の都合で、沼や林がどんどん小さくなっている。このままで、いいのだろうか……。)

人々が生きていくためには仕方がないことだと思いつつも、幸四郎の心にはもやもやとしたすっきりしない思いがわき上がってきました。

それから十年もの年月が流れた、昭和三十八(一九六三)年。幸四郎に大きな転機が訪れました。近くの小学校

で、環境問題についての講演会が行われたのです。講師は、この問題についてくわしい大学の先生でした。新田の住民を集めてこのような講演会が開かれたのは、初めてのことです。幸四郎は、その話にすっかり引きこまれました。聞いているうちに、新田に戻って以来十年間、ずっと心にあつたもやもやが何であつたのかに気づかされました。

(新田の人たちの暮らしはもちろん大事だ。しかし、自分たちの暮らしの豊かさだけを求め、自然や動物がぎせいになるようではいけない。この伊豆沼の自然を守り、そこに住む人たちと生き物たちがともに幸せに暮らせるふるさどにしたい。そのためにも、今、何か行動しなければ。)

幸四郎は講演を聞いてから、ふるさとの自然を守るために自分ができることは何か、必死になって考えるようになりました。

そんな中、ある新聞記事を目にしたのです。それは、青森県で行われている白鳥のえさまきの様子が紹介されたものでした。

(白鳥か……。そうだ。白鳥ならば、伊豆沼にもいくら飛んでくるではないか。新田でも、白鳥にえさをあたえることができるかもしれない。)

当時の伊豆沼は、数羽の白鳥が一時的に羽を休めに来るものの、すぐに飛び立つ状態でした。

(えさをまいて、伊豆沼にたくさん白鳥を定着させるんだ。白鳥がたくさん来るようになれば、関心が集まる。人々の目も伊豆沼の生き物やその自然に向けられていくにちがいない。……よし、今自分にできることが見えてきたぞ。)

幸四郎は、早速白鳥のえさにするために近所の人にたのんで茶がらを集めました。そして日の出とともに、ツルハシと茶がらを積んだリヤカーをひき、伊豆沼に出かけました。片道一キロメートルほどの道のりです。

当時の伊豆沼は現在よりも冬の寒さが厳しく、水面が一面凍っていました。水鳥は水中でえさを食べるため、えさまきのためには、氷をくだいて水面を出す必要があります。これが大変な作業でした。いつしか、登校途中の中学生数名といっしょに作業をするようになりました。彼らもまた、白鳥に関心をもっていったのです。

氷の上に立ち、凍える手でツルハシをにぎります。厚さ十五センチメートルほどの氷を少しずつくだき、まずは小さな穴を開けます。そしてその縁をけずって少しずつ広げ、直径三メートルほどの大きな穴にするのです。

伊豆沼：
現在の栗原市と登米市にまたがる沼。

干拓：
沼や湿地から水をぬき、田畑などにすること。

ツルハシ：
農機具。硬い土を掘り起こすのに用いる道具。鉄製で両端、または片方だけをつるの口ばしのような形に作り、柄を付けたもの。
リヤカー：
荷物を運ぶために自転車につないだり人が引いたりする二輪車。

「さあ、食べてくれ。」
やっと出てきた水面に、幸四郎が持ってきた茶がらや中学生たちが持ち寄ったモミヌカをまきます。

しかし、警戒心が強い白鳥たちは、まったく見向きもしませんでした。それでも、幸四郎たちは根気強く毎日えさまきを続けました。

雪が降り風の強い日などは、伊豆沼は本当に身が凍るような寒さです。幸四郎は奥さんから、

「こんな日はかぜをひきます。やめてください。」

と、いく度となくお願いをされました。しかし、決して行くのをやめようとはしませんでした。氷をくだいているうちに沼に落ち、全身ずぶぬれになってしまうこともありました。えさまきを終えて帰るころには、着物はすっかり凍ってしまいました。



えさまきのために、伊豆沼の氷を割る様子
（『白鳥の世界』川嶋保美氏撮影）

そんなことを一か月も続けたある日、ついに、一羽の白鳥がおそろおそろ近寄って、えさをついばみ始めたのです。すると、他の白鳥もつられるようにえさに口ばしをのばし始めました。

「食べたぞ。」

生徒たちが小さく声をあげました。かたをたたき合って喜ぶ中学生たちの様子を、幸四郎も目を細めて見つめていました。

その後も、幸四郎たちはえさまきを続け、えさをもとめて伊豆沼に来る白鳥の数は少しずつ増えていきました。この様子が迫地区の広報誌でも紹介され、人々の関心が伊豆沼に少しずつ向いていきました。こうして、幸四郎は二十数名の仲間を集め、新田に「白鳥愛護会」を発足させたのです。新田での講演会の翌年、昭和三十九（一九六四）年の暮れのことでした。

愛護会の会長となった幸四郎は、地域の人々とともにえさまきをするようになりました。最初は愛護会の発足に

しびい顔をしていた人々も、いつしか一生けん命えさ集めに協力してくれるようになりまし。新聞でえさがまだまだ必要であることを訴えたところ、全国からもたくさんの方が送られてくるようになりました。こうして、新田全体に白鳥愛護の輪がどんどん広がっていきました。昭和五十九（一九八四）年には、白鳥愛護会のメンバーは、なんと二百名をこえていたといひます。

幸四郎たちの活動がもとになって、昭和六十（一九八五）年、伊豆沼、内沼はついにラムサール条約の登録湿地に指定されました。伊豆沼の周りには、白鳥愛護だけでなく沼全体の自然を守りたいという人たちがたくさん集まってくるようになりました。

そして幸四郎の「ふるさとの自然を守りたい」という思いは、亡くなった今もその人たちに引き継がれ、伊豆沼の自然環境全体を本来の姿に戻そうとする取組が行われています。周辺でたくさん沼が干拓されて無くなっていく中で、伊豆沼は、豊かな自然を残しています。この沼とそこに住む生き物たちは、今も守られ続けているのです。

今でも、伊豆沼にはたくさん白鳥が遠くシベリアからわたって来ます。幸四郎が愛した伊豆沼は、今や世界有数の水鳥の飛来地としてだけでなく、貴重な動植物の生息地として世界的に知られるまでになっています。



伊豆沼に集まる観光客の様子
（塚博氏撮影）

モミヌカ：
もみぐら。もみの最も外側にある皮の部分。

発足：
団体が作られ活動し始めること。

ラムサール条約：
正式名称「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。湿地に生息・生育する動植物、特に国境を越えて移動する水鳥を中心に、国際的な保護・保全を目的としている。

相澤 幸四郎
相澤 幸四郎は、明治三十（一八九七）年、新田村（現在の登米市迫町新田）の農家に生まれた。校長職を退職した後、二宮尊徳の「報徳の道」をもって、郷土の再建をしようとした。晩年は、「迫町白鳥・ガン愛護会長」「伊豆沼湖畔群の自然を守る会長」として、伊豆沼でえさをまく姿が多くのマスメディアで紹介された。

二宮尊徳：
江戸時代後期の政治家。